

百舌鳥陵墓参考地倒木復旧に伴う調査

はじめに

百舌鳥陵墓参考地は大阪府堺市北区百舌鳥本町1丁に所在する墳長約200mの前方後円墳で、遺跡としての名称は御廟山古墳である。当参考地では、平成20年秋に墳丘裾の護岸工事にさきだつ事前調査が実施され、墳丘第1段平坦面上の円筒埴輪列が複数個所で確認されるとともに、造出と前方部側面との屈曲部付近から罎形埴輪・家形埴輪が出土したことや、造出上面から筑形土器や土製品などが出土したことで著名である(本誌第61号にて報告)。

平成30年9月に日本列島へ上陸した台風21号は近畿地方を中心に甚大な被害をもたらしたが、陵墓も例外ではなく、当参考地では前方部墳頂の北側を主として倒木が発生した。これらの倒木のなかには幹が折れずに木全体が倒れ、土をかかえて根ごと起きあがってしまったもの(以下、根起きとする)もあった。当庁では台風の通過後に陵墓地内の被害状況の把握につとめたが、当参考地でも今回調査を実施した根起き箇所などで埴輪が露出していることを確認できたため、状況の確認と精査をおこなって記録化し、埴輪を回収する調査を実施した。

調査は令和4年1月11～18日におこない、陵墓調査室の加藤一郎が担当した。調査の実施にあたっては堺市の十河良和氏、小林和美氏、富島健司氏からご指導を賜った。なお、報告で使用する座標は、ITRF(国際地球基準座標系)にもとづいた世界測地系の平面直角座標第IV系をもちいており、高さの基準には東京湾平均海面(T.P.)をもちいた。

1. 根起き箇所の調査(第46～48図、図版45)

調査開始時に複数ある根起き箇所の状況をあらためて確認したところ、埴輪が確認できたのは最も大きな根起きとなっていた前方部墳頂の北側付近と南側くびれ部付近の前方部第2段斜面の2箇所のみであった(第46図)。このうち、後者では円筒埴輪片1点を確認したのみであり、斜面に位置することから考えると、円筒埴輪列が存在するとは考えがたく、その位置を測量して記録することで対応した。

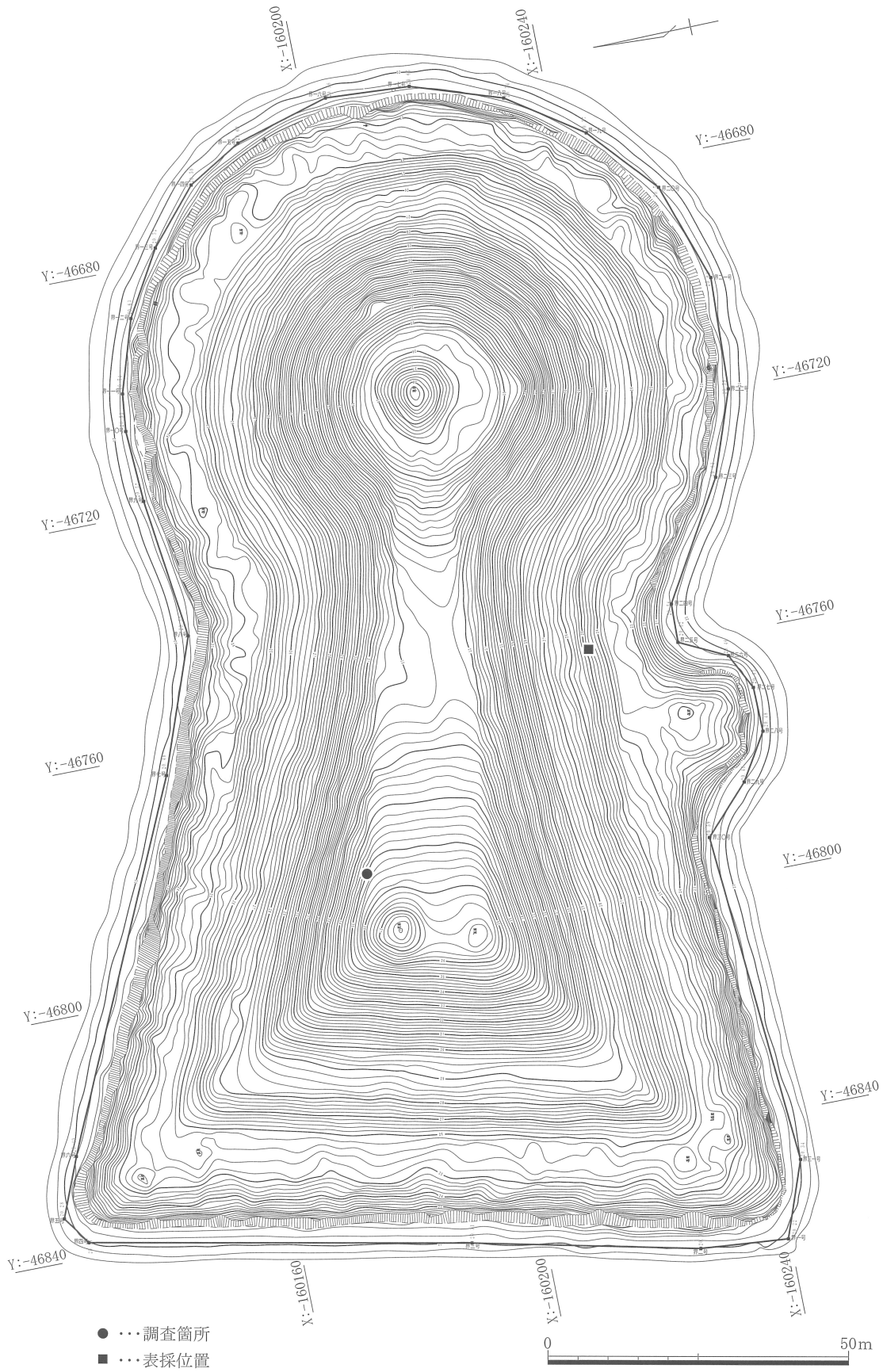
今回の調査箇所である前者については、根起き部分の直径が約5mであり(第47図)、平成30年の台風21号による各陵墓における根起きのなかでも最大規模のものといえる。また、この根起きの西側10mほどのところでも同等の大きな根起きを確認できたが、そこでは埴輪片などの遺物を確認することはできなかった。

すでにふれたように、今回調査をおこなった根起きは前方部墳頂の北側の側面に位置しており、埴輪片が多数確認できたことから、前方部墳頂平坦面の端に設置された円筒埴輪列が根起きによって損壊されている可能性を想定できた。

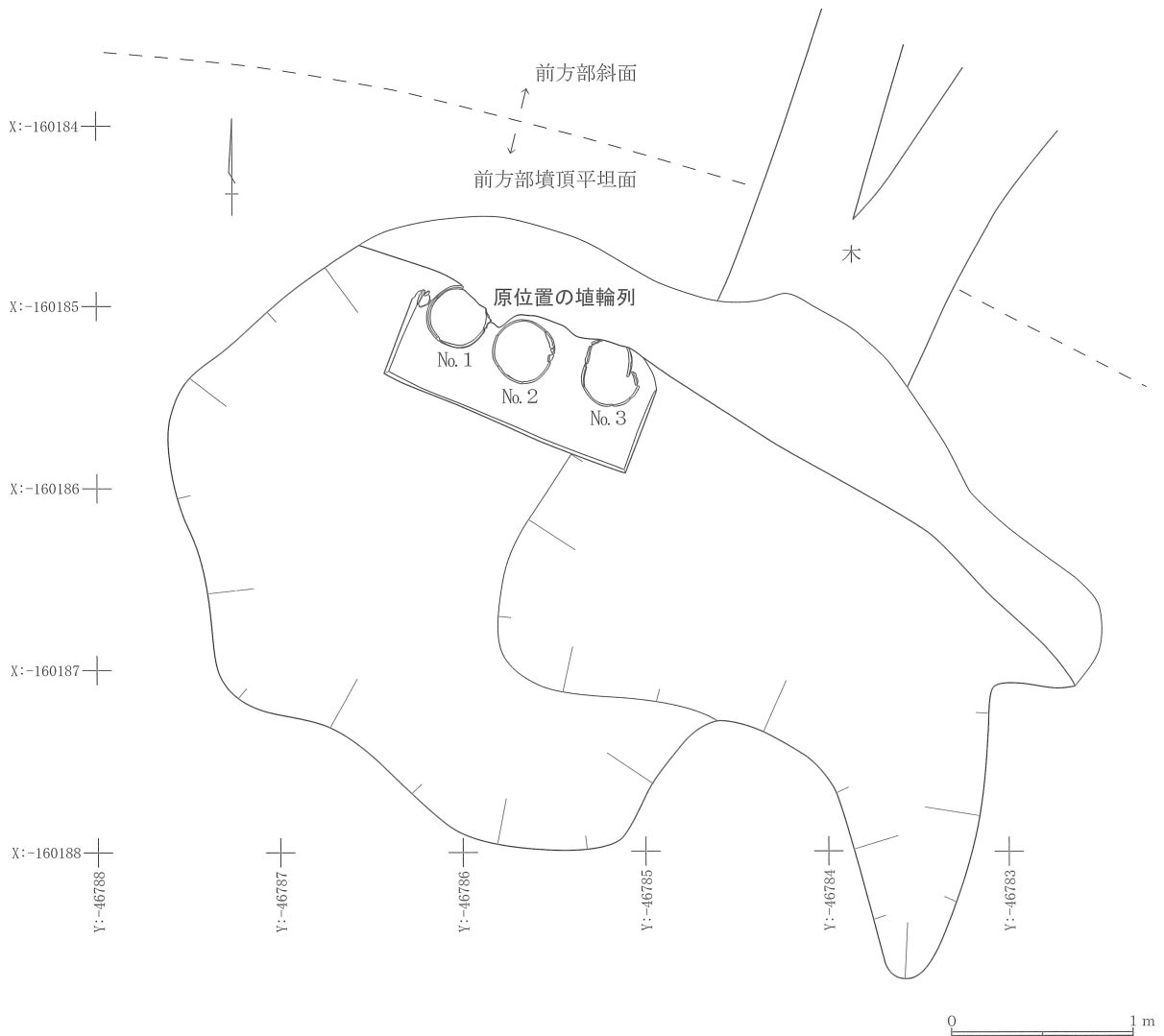
そこで、まず根起きによって根とともに起きあがってしまった部分の土を精査したところ、円筒埴輪が列状に並ぶことを確認できた。また、この確認できた円筒埴輪には底部がみられなかったことから、底部付近については根とともに起きあがらず墳丘に残存しているものと判断された。そのため、起きあがってしまった部分に対応しそうな位置に約0.5m×約1.5mのトレンチを設けて掘削をおこなった(第48図)。

このトレンチを掘削した結果、想定どおり円筒埴輪列を確認することができた。確認できた埴輪は3個体であった。調査後の整理作業の結果、このトレンチ内で確認された埴輪と根起きによって起きあがってしまった部分で回収した埴輪片の多くが接合したため、根起きによってトレンチ設定箇所の円筒埴輪列が損壊されてしまっていたことが確認できた。

確認された円筒埴輪列を構成する埴輪については、便宜的に西から東へNo.1、No.2、No.3とした。整理作業の結果、No.1と3は朝顔形埴輪であり、前方部墳頂平坦面端の円筒埴輪列は円筒埴輪と朝顔形埴輪が交互に配置されていたと推測される。なお、円筒埴輪列は、墳頂平坦面の端から約1.3m内側に設置されていた



第46図 百舌鳥陵墓参考地 調査箇所位置図 (1/1,000)



第47図 百舌鳥陵墓参考地 調査箇所 平面図 (1/40)

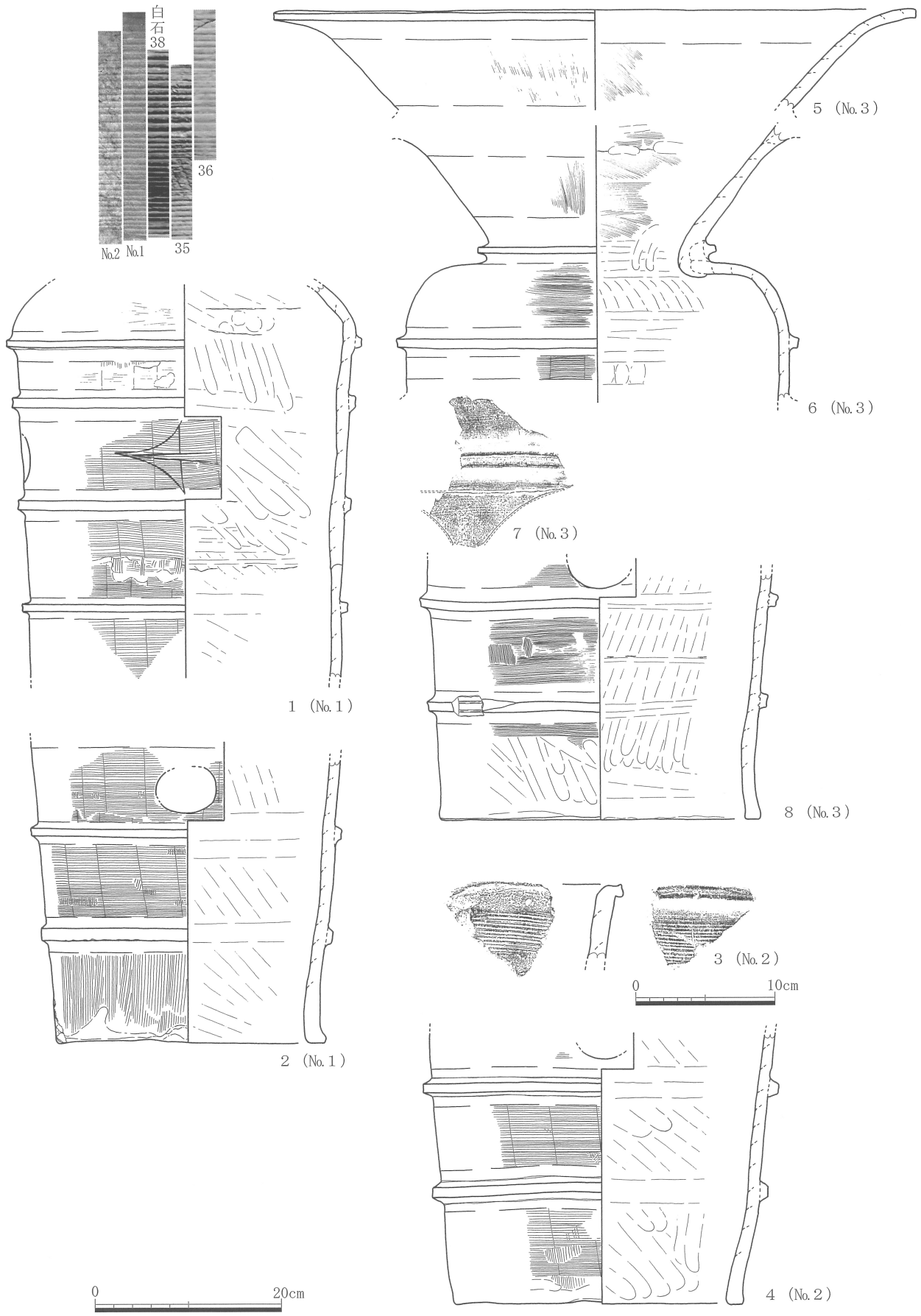
ようである。

調査で確認された土層は、木の根による攪乱土〔I層〕と古墳築造に伴う各種盛土〔墳丘盛土（Ⅱ、Ⅴ層）、埴輪内埋土（Ⅲ、Ⅳ層）〕のみであった。円筒埴輪列の設置に伴う掘方は確認できず、墳丘盛土をほどこす過程で円筒埴輪列も同時に設置されたようである。円筒埴輪の内外のどこまで盛土がほどこされていたのかについては、木の根による攪乱が激しいため不明であるが、内外ともに第1段まで埋めていたことは確実といえる。No.1をみるかぎり、第1条突帯よりも上の位置にⅢ層とした埴輪内埋土が存在するので、第1段よりも上まで埋められていたのではないかと推測される。第1段平坦面の円筒埴輪列では、場所によって第3条突帯や第2条突帯など埋める高さが異なっていたことが確認されている（本誌第61号）。

2. 出土遺物（第49図、図版45～46）

今回の調査で確認された遺物はすべて埴輪片で、その総数は169点（ビニール袋で15袋分）であった。これまでに知られている当参考地の埴輪の様相から逸脱するようなものは確認できない。

1、2は円筒埴輪列のNo.1とした個体で、朝顔形埴輪である。底径は約29cm、第1段高は12～12.5cm、突帯間隔は10.5～11cmである。当参考地の朝顔形埴輪は円筒部が6条7段構成で第3段と第6段に円形の透孔が二つずつ穿たれることが通有であることから、以下、それに準じて記述する。確定できる外面の最終



第49図 百舌鳥陵墓参考地 出土埴輪実測図 (1/4, 1/6)

突帯間隔は約 11cm である。第 1 条突帯の剥離面では突帯設定に伴う二重凹線がみられる。第 1 段の外面調整は静止痕を伴わないヨコハケもみられるものの、ナデが主体となっている。第 2 段外面の最終調整は静止痕を伴わないヨコハケとなっているが、第 7 段外面では静止痕をもつヨコハケがみられる。なお、第 6 段の外面にはヘラ記号がみられる。内面調整は肩～円筒部でナデを主体とするが、口縁部ではハケがみられる。頸部の接合方法については、判然としないため推測もまじえて復元的に図化した⁽²⁾が、通常とは異なる成形方法となっている可能性がある。肩部の屈曲がややきつくなっている点と何か関連があるのかもしれない。なお、No.3 のハケメは平成 20 年の調査の際に出土した 57、58 などとパターンが一致する⁽²⁾。

まとめ

今回の調査の結果、前方部墳頂平坦面端に設置された円筒埴輪列を構成する円筒埴輪・朝顔形埴輪 3 個体分を確認した。当参考地の円筒埴輪は、第 1 段平坦面では 6 条 7 段構成、造出上面では 5 条 6 段構成を基本とすることが知られているが（本誌第 61 号）、今回の調査で確認された資料から類推すれば前方部墳頂平坦面端の円筒埴輪の段構成は第 1 段平坦面と同様に 6 条 7 段構成であったと考えられる。また、当参考地では墳丘第 1 段平坦面の円筒埴輪列は「円筒埴輪 3 本+朝顔形埴輪 1 本」を基本単位としていたことがわかってきたが、前方部墳頂平坦面端では「円筒埴輪 1 本+朝顔形埴輪 1 本」が基本単位だったことが判明した。このことから、円筒埴輪列における朝顔形埴輪の出現頻度は古墳の場所によって意図的に使い分けられていたことを指摘できる。

なお、調査をおこなった根起き箇所については、根ごと起きあがってしまった土を調査時に可能なかぎり落とすことで、根起きによって落ち込み状に凹んでしまった箇所を埋め戻し、土嚢をもちいて養生をおこなった。

（加藤一郎）

註

- (1) 堺市教育委員会『御廟山古墳（GBY-6）発掘調査報告書』2011 年の 147 頁でハケメ C としたパターンである。
- (2) 堺市教育委員会『御廟山古墳（GBY-6）発掘調査報告書』2011 年の 148 頁でハケメ M としたパターンである。



1 調査箇所全景（南西から）



2 調査箇所全景（南東から）



3 円筒埴輪列検出状況（南西から）



4 円筒埴輪列調査状況（南西から）



5 埴輪No.1 肩～胴部（1）



6 埴輪No.1 胴～底部（2）



1 埴輪No.2 胴～底部 (4)



2 埴輪No.3 胴～底部 (8)